

米欧回覧

第13号
編集・発行
米欧回覧の会
事務局

日本の政治をどうする—第十一回例会

— 平成の志士・中村敦夫氏を迎えて

第十一回の例会は、十月十七日(土)午後一時より国際文化会館で、現未来部会担当により行われた。会は七十名を越える出席者を得て、浅沼晴男氏の司会により開催され、最初に泉三郎氏より挨拶と会務についての全体報告があり、次いで各グループの幹事：歴史／小田八郎氏、現未来／郡山史郎氏、実記／阿部賢一氏、映像／足立光正氏、国際交流／浅沼晴男氏：より、それぞれ別記のような活動内容についての報告があった。

午後一時半からはゲストスピーカーである話題の新参議員中村敦夫氏を迎えて、郡山氏の司会で行われた。初めに中村氏より一時間余にわたり講演があり、その後、各テーブルから盛りだくさんの質問が出され、中村氏はそれ



にひとつひとつ丁寧に応え、予定の時間を三十分以上もオーバーする結果となった。

講演内容の詳細は別記するが、新議員がいきなり二ヶ月半も体験した驚くべき国会内部の形骸化した様子、恐ろしいほどの既得権益集団の低次元の取引の実体、そして菅直人氏の五十兆円発言の内幕にいたるまでが生々しく語られ、まるでその渦中にいるような臨場感を味わうことができた。

またそれに対する会場からの質問・意見は、夢に賭ける平成の志士への熱い声援はむろんのこと、辛口の理想主義批判も含め、民主主義の本質にかかわるシリアスな問題から、田中秀征は何故選挙に弱いか、クリントンスキヤンダルをどう思うかまで、多彩を極めた。

その後コーヒープレイクがあり、四時二十分からは塚本弘氏の司会により、政治とメディアという二つのテーマに絞り、熱心なディスカッションが五時半まで行われた。

また、そのあとは別室でスナックパーティーが行われ、くつろいだ雰囲気の中でバラエティーに富んだショートスピーチがあつて大いに交歓を深めた。



司馬遼太郎の原作であるNHKの大河ドラマ「徳川慶喜」をみてみると、現在の日本のダッチロールぶりが当時の政治状況に大変似ていることをあらためて感じる。

幕末維新の激動はまさしく一八五三年のペリー来航から始まった。主席老中の阿部正弘はこの歴史的な事件にどう対処するかを思い惑い、これまでのように幕府の一存で決めるべきではないと判断し、諸大名に意見を聞き朝廷にも伺いをたてることになった。この判断は正しかったが、それは同時に幕府の危機対応能力の無さを告白し、また幕府の権威を失墜させるきっかけにもなった。

以後、薩摩・長州・土佐・福井・宇和島などの諸大名が意見を具申し、朝廷勢力も盛んに政治に口を出すことになる。公武合体の運動、長州の尊皇攘夷運動、幕制改革、各藩制の改革…そして草莽の浪人が騒

平成ダッチロールとモンジロウの決起

ぎ出すのもその現れであった。そうした状況下、吉田松陰は徽を飛ばした。徳富蘇峰はその松陰の心情をこう表現している。「幕閣も藩庁も京都も意の如くならざると見るや、ここに於いて猛然と決心したり。すなわち既存の勢力をまたずして、草莽の志士を糾合し、空拳をふるうて、天下のために、最初の一撃を尊攘の妨害物に加えることはなり。」

その意を体した高杉晋作は一八六三年、「奇兵隊」を結成する。いわゆる「この危機には贅沢になり強健のものは、その身分いかにかわららず参加すべし」と。つまり民兵を組織して敢然と立ち上がったのだ。

平成のダッチロール期敢然として「国民会議」を旗揚げしたナカムラ・モンジロウは、まさに平成の晋作を連想させるものがある。因みに、明治維新は奇兵隊結成後、わずか五年で実現する。ベルリンの壁にも見るように、時代が動くときは意外なほどに速いというべきか。

◆現場に立つて◆

自分は世界の六十ヶ国くらの取材を体験しています。スラム街から宮殿に至るまで、幅広く人々に接した。そのような現場に立ったことにより、単なる知識ではない確信が蓄積された。それが自分の意見を形成している。

そして今回、はからずも「絶対には入るまい」と思っていた政治の世界に人生の最終コースで入ってしまった。でもそれにはそれなりの必然性があったことです。

きのう国会が終わった。通常なら選挙の後は国会はそのまま休むのだが、今回は選挙の後国会がずっと開かれた。だからこの二ヶ月半、選挙から国会への休みのないハードなスケジュールで本当に大変だった。

もともと国会はひどいところだとは思っていたのだが、知っていることと体験は別物。知っていることが本当にこの身に起こる、この辛さを痛烈に味あわされた。

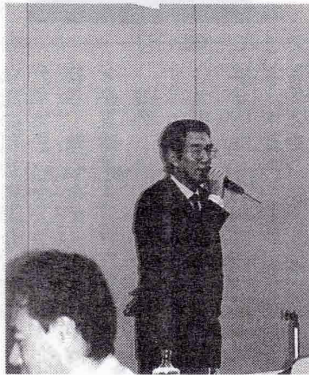
まず国会というものの運営そのものが縄文式時代くらいに時代遅れである。国会はすべてが儀式で、本質なところはホテルだか料亭か知らない

が、少数の実力者が集まって決めてしまう。まず八割の議員は何の意思表示も出来ない構造になっている。全て決着がついているから議会は追認の儀式である。そこで語られる言葉は、作文の棒読みでそれを延々とやる。聞いていてもどうもならない。

特に参議院は衆議院でやったことをもう一度やる。既に

中村敦夫氏の講演 (要旨)

日本を
変える
ために



は果たしていないのが実情である。その法案でさえ、議員の九割は読んでいない。そもそも読んで解らない文章になっている。官僚が作って、読んでも解らないものにして、彼等だけが解る暗号で法律を独占している。そのことに議員や一般の人々は対抗できない。委員会には少しは専門の人もいて検討はしているがと

新聞なんかに出ていることを、

二時間も、時には四時間も聞かされるようなばかばかしいことをやる。賛成するほうも反対するほうも、衆議院のコンビをそのままやるから、映画なら二番館だ。

国会は立法機関のはず。それが行政府の官僚のつくったものばかりやっていて、議員立法は少ない。立法機関としての役割を選ばれた議員たち

でも不十分である。

採決の朝、党や会派の部屋に議員は集められ、法案を説明されるがとても理解はされず、とにかく「賛成しろ」とか「反対しろ」と言われるだけ。それで席でボタンを押して賛成か反対をする。保留なんてものはない。賛成か反対だけ。ボタンを押すだけ。だから何もしないつもりなら、こんな楽な商売はない。誰に

でもできる。橋本聖子さんにも出来る。ただ、私のようにこの党にも属さない、どんな情報も入りません。全部自分でやらないといけない。スタッフも手伝いますが、非常に大変な作業です。

◆大変恐ろしい事実◆

この二ヶ月半に三十の法案が出た。どういう具合に法案が決まるか、という大変恐ろしい事実がわかった。その法案が国民にとってどういう意味があり、国民の生活にどのような影響を与えるか、などを考えている議員はいない。これには驚いた。立場によって賛成・不賛成は、それはそれで良いのだが、内容が見られていない。

例えば、「労働基準法を一部改正する法案」というようなものがある。これはリストラの為の法律であり、経営者にとっては良いが、働くものにとっては決して良くない。働くという行為が、市場経済の論理で、利益のみによって支配されて良いだろうか。社会を維持していく、社会に貢献していく、という面を考えなければいけない。能力だけで、金銭だけで、働くという

ことを解決してよいのかという根本的なことが考えられていない。そこで私は反対投票をした。反対したのは私を入れて三人と、他は共産党。共産党は嫌いだ、同じ投票になつてしまう。では、何故、社会党や民主党が、この案に賛成するのか。連合だつてパツクにいる筈なのに。

ところが、これが日本の政治を本当に悪くしているのが、この連中は別の件で自民党と取引をしている。法案に関係なく、こちらで譲るからこちらでということ、例えば公務員の首切りをやらないから、こちらに賛成せよとか、そういう取引をやる。団体の圧力に負けてやっている。自民党は乱交パーティーだから、なれあいで全員賛成になってしまう。そこでこんな法案ができてしまう。国民は知らない。ジャーナリズムも売れ筋のニュースではないので取り上げない。こんな法律がどんどん出来ている。例えば金融法案など、本当に訳が分からない。長銀問題を契機に、日本を大きく変えられるチャンスだった。一つは情報公開、もう一つは大蔵省の支配を変えること。これは日本の歴史を変えるくらいの機会だった。

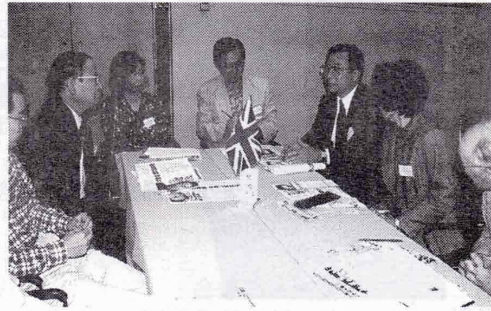
カの手持っている権益を守るため、そのためにアメリカは沖縄にいる。これが一番大きい。これは、片務条約、不平等条約だ。これには日本は関わってはいけない。日本は日本を脅かす国の軍備を考えて防衛計画をつくるべき。『どこがどのように日本を脅かしているのか』そのようなことは、一切発表されていない。今の防衛庁は、私権に群がっている人々の集まりに過ぎない。

◆合州国構想◆

三つ目は日本合州国構想。日本は黒船が来て、これではいけないということになり、明治維新をやり、岩倉使節団を出して、植民地主義に対抗するために急速な経済成長をやり、富国強兵をやった。その達成のために、中央集権独裁国家をつくった。明治の人たちは、そういう方針を立てやり遂げた。

その後は、官僚独裁・中央集権という形が鶴のようにこの国を形造っていった。軍官僚が果てしなく強くなり、統帥権というありもしない権力を振りかざし、絶対権力を持ち満州事変といった暴走を始める。これがそのまま太平洋戦争に突入していく。官僚制

というのは、責任者のいない機構である。敗戦と分かっているにもかかわらず責任者がいない。被害がいくら拡がっても止められない。今と同じ。被害が拡がるのに事実が隠されてしまう。戦争を終わらせたのはアメリカである。原爆を落とした。日本は自分たちのことを自分たちで処理できなかった。



明治維新のときは政治家がいたが、それ以来政治家がいなかったというのは、日本近代史の悲劇であると考えている。戦後は経済路線を走った。殖産興業、大蔵省がずっとやった。そして、今また敗戦だがそれを認めず、事実を公表

しない。政治家たちは政治をやらず、幹旋業をやっているだけ。実際にやっていたのは官僚たち。これが自民党の政治である。自民党は、宮沢さんに代表される大蔵官僚と、竹下さんに代表される裏でかせぎまくる人たちの二輪車でやってきただけ。

そういう形は、もう駄目。日本はよく繁栄したが、今、危機を迎えている。国にも生命があり、日本は今衰退だから、もっと別な、安定した活力ある国の形をつくらねばならぬ。膨張経済ではない。財政赤字をとめどなく膨らませるやりかたではない。

それを解決するため合州国制をやる。二つの県くらいを一つの州にして、産業・行政などの財源は州に与える。八十%は州で、二十%を国でやる。外交とか、全体の調整だけを国でやる。これは日本を変えるためだ。

「明治維新の逆をやる」と一人で燃えている訳です。ここは一つ、夢のある政党に賭けてみよう。「のるかそるか、やってみよう」という人がいたら、一緒にやりましょう。：店は開いています。いつでも来てください。

グループ 報告

幹事の多田さんのご好意で、素敵な「青山テラスガーデン」と手作りの料理を提

供していただき、一杯やりながら和氣藹々のうちにやります。読むだけでなく、いろいろのキャリアの方がおられるのでその体験的コメントが聞けて大変楽しく有意義です。そして時には現代の問題にまで発展し白熱した議論も行われています。初めての方もお気軽に参加してください。

歴史

前回は十月一日、「司馬史観・再論」をテーマに、半沢氏より「峠」、大野氏より「天皇論」、小田氏より「飛騨街道」に関する発表があり、参会者の中で活発なディスカッションが行われた。つまるところ、史実重視の「司馬史観」というより、やはり「歴史文学」とみるのが妥当だろうという説におちついた。

次回は一月二十二日、東野真の「昭和天皇一つの独白録」をテキストに「天皇論」をやることになりました、どうぞいらしてください。

未来

今年シリーズで国会議員を招いて現実の政治について考え、語ろうという趣旨でやっています。前回は参議院議員の峰崎直樹氏、今回は中村敦夫氏、次回は衆議院議員の熊谷弘氏をお招きします。関心のある方はふるってご参加ください。

映像

十二月の映像の会は、三十分スライドもの十巻を一日でみてしまおうという豪華版の企画です。見終わったらすっかり「岩倉使節団の一員」になった気持ちにひたれるというスゴイ会です。一年に一回はこれを見て、日本を考えましょう！日本人必見の映像です、どうぞ多くの人、特に若い人を誘って下さい。

国際交流

第十二回の例会は国際交流部会の担当で行います。岩倉使節団は一八七三年の正月をパリで迎えたのでそれに因んだ趣向を考えています。不況風を吹き飛ばすような、明るい、華やかな、そしてちょっと洒落な会にしたいと思います。どうぞお楽しみに・・・

『米欧回覧の会』ご案内

趣旨 この会は「岩倉使節団」に興味を持ち、その記録である、「米欧回覧実記」に関心を抱く人々の集まりです。この大いなる旅と「実記」はまさに「温故知新」の宝庫と言えましょう。

この素材を媒体にして歴史をふりかえり現代の直面する諸問題についても自由に語りあおうという会です。

会員 上の趣旨に賛同する人なら誰でも入会できます。

例会 年に4回くらい会合をもつ予定です。

事業 次のような活動をする予定です。テーマ別グループ活動・映像サロン・講演会・旅行会研究会・シンポジウムなど。

機関誌 年に4回程度機関誌を発行し、活動報告や会員の意見発表、情報交換の媒体とします。

幹事 会員の中から、代表1名、幹事数名を選び、運営を担当します。

会費 年会費3,000円とし、主として通信費および機関誌代に充当します。例会・研究会・講演会などについては、その都度の会費とします。

事務局 当面は『ミササ・オフィス』に置きます。

〒192 八王子市元横山町1-14-16
-0063 TEL0426-46-1949
FAX0426-45-8700

入会申込

氏名・連絡先（自宅或いは勤め先の住所・TEL・FAX）現職&キャリアを事務局までFAXまたは郵便でお送りください。

なお、年会費は郵便振込が便利です。
00180-2-580729

米欧回覧の会

〈催し案内〉

お申し込み・お問い合わせは事務局又は各担当幹事へ

★第12回例会：新春交歓パーティー

日時：1999年1月29日（金）18：00～

場所：国際文化会館レセプションルーム

テーマ：「パリの新年」

岩倉使節団が迎えた二度目の正月の雰囲気を。

国際交流部会担当（詳細は別途お知らせします）

★映像の会

日時：1998年12月12日（土）10：30～

場所：日本プレスセンタービル10階ホール

テーマ：「岩倉使節の世界一周旅行」

会費：3,500円（弁当、お茶代を含む）

年に一回のオリジナル版映像・全十巻のマラソン上映会です。映像部会・企画部会担当

★分科会

●実記を読む会

日時：第15回・11月5日パリの後編

第16回・12月3日ベルギー編

場所：青山テラスガーデン

（クラウンインターチェンジプログラムス内）

●現未来部会

日時：1998年11月19日 18：30～

場所：国際文化会館セミナールーム

テーマ：「日本をどうする？」

衆議院議員（元通産大臣・内閣官房長官）

熊谷弘氏を招いて

●歴史部会

日時：1999年1月22日 18：30～

場所：国際文化会館セミナールーム

テーマ：「天皇制について」

★NHKラジオ放送「文化講演会」

泉三郎「岩倉使節団の見た欧米諸国」

前編：12月6日（日）21：00～22：00

（再）12月13日 9：30～10：30

後編：12月13日（日）21：00～22：00

（再）12月20日 9：30～10：30

*編集後記

モンジロウ講演の中の一キードの一つに「質実剛健」という言葉があります。いかにも世代間ギャップを感じさせる古い言葉です。会場からこの表現は若い人には解らないのではないかとこの疑問が出されました。中村氏もそれには苦笑を禁じ得ず、今流に言えば「シンプル・ライフ」というべきでしょうか、と応えました。

実は「質実」は細川政権が誕生したときのキャッチフレーズでもありました。そのとき細川氏は「質の高い実のある国づくり」と解説してみせました。要するに「無用の贅沢、虚飾、浪費」といったイメージの反対概念を意味したかったのでしょう。「剛健」はさらに「柔弱、頹廢、不健康」を排する意味をこめたものと考えられます。

しかし、いかにも旧弊であり一面的であり、いまひとつアピールする力に欠けています。時代の要望ともいうべきものを明快に表現できるように「これだ!」というにかいい言葉はないでしょうか。